

〈特集〉飯島渉先生

粹を打破する人

飯島先輩と出会ったのは一九八八年、私が東京大学大学院の東洋史修士課程に進学したときだった。当時、彼は博士課程の一年生で、指導教官はアジア近代史の泰斗・濱下武志先生であり、一方私は、宋代専門の斯波義信先生に師事していた。専攻は異なっていたが、私たちは多くの授業とともに受けた。

彼の研究発表を初めて聞いたのは、その年の五月。「通商条約とアジア『近代』」と題した報告で、一九〇二年のマツケイ条約交渉を扱ったものだった。彼の研究は、一九八〇年代にはこのような清朝末期の中英交渉や海関がおもなテーマだったが、九〇年代には医療史へと研究の歩みを進め、脇村孝平氏、見市雅俊氏らとともに、感染症史の研究を本格化させた。グローバル・ヒストリーという言葉すらほとんど聞か

れなかった時代に、である。早くも二〇〇〇年には研文出版から『ペストと近代中国』を上梓し、その後も精力的に研究を推し進めた彼が、いまや感染症史研究における第一人者であることに、異論を挟む者はいないだろう。

授業においても、彼は独創的な試みを積極的に行ってきた。彼のゼミの卒論には、「マイクローエープの文化史」（電子レンジの普及）、「BLの変遷」（サブカル）、「大豆の向こうに見える世界」（遣伝子組み換え）など、一見すると歴史学とは無関係に思えるテーマが少なくない。しかし、彼は決して放任主義ではなかった。学生に的確なアドバイスを与え、トピックを掘り下げさせ、根拠を持って論じられるように導いた。学生は彼の指導を通じて、当初持っていた漠然とした思考を具体化し、感想ではなく論拠を持った議論を構築する力

青 木 敦

を養っていった。彼は「東洋史」「歴史学」という枠を超えた授業を行った。

学問や教育だけではなく、彼は学内行政にも大きく関わってきた。史学専攻の大学院演習は、かつては「東洋史演習」と呼ばれていたが、彼の主導により「グローバル・アジア史演習」へと改められた。ともに長く働いてきた者であれば、彼が要所々々において、制度の改善を志してきたことを、知っているであろう。彼は確かに「枠にとらわれない人」ではあるのだが、より適切に表現するならば、「枠を打破する人」なのである。

彼が長崎大学の熱帯医学研究所へ赴任することになった。そこに矛盾はない。歴史学を考えるならば、グローバル・ヒストリーの視点が不可欠であり、感染症はそれに最適なトピックの一つである。だが、感染症の研究には当然のこととして、医学的な知識も必要であり、そのためには従来の歴史学の枠を超えた連携が不可欠だ。まったく理にかなっているかの地での彼の研究が、さらに新しく展開していくことを願ってやまない。

しかし、一つだけ残念なことがある。それは、彼が学生教育から距離を置かざるを得なくなることだ。彼の指導のもとで学んだ学生は、研究的思考を鍛えられ、大きく成長していった。今後、そうした彼の授業が青学から消えてしまうの

は、残念でならない。ただ、嘆いてばかりでも済まされない。むしろこれは、私たち教育現場に残る者に新たな課題が投げかけられた、ということでもある。私は学生時代から、彼に多くを教えてもらった。そして今、私は授業で何をすべきなのか、研究の方向はこのままで良いのか、何かに安住しているのではないか。彼の熱帯医学研究所への赴任にあたり、私は改めてそれを真剣に考える機会を彼から与えられたように思う。